

機 関 名	立命館大学		機関番号	34315	拠点番号	E-12
1. 機関の代表者 (学 長)	(ふりがなくローマ字) Kawaguchi Kiyofumi (氏 名) 川口 清史					
2. 申請分野 (該当するものに0印)	A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> D<人文科学> <b>E&lt;学際、複合、新領域&gt;</b>					
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	「生存学」創成拠点—障老病異と共に暮らす世界へ— Ars Vivendi: Forms of Human Life and Survival					
研究分野及びキーワード	<研究分野:科学社会学・科学技術史>(障害)(老い)(病)(マイノリティ)(支援)					
4. 専攻等名	先端総合学術研究科先端総合学術専攻、人間科学研究所(立命館大学)					
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)						
6. 事業推進担当者	計 16名 ※他の大学等と連携した取組の場合: 拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [100%]					
ふりがなくローマ字 氏 名(年齢)	所属部局(専攻)・職名	現在の専門 学 位	役 割 分 担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー) Tateiwa Shinya 立岩 真也(51)	先端総合学術研究科先端 総合学術専攻・教授	社会学・ 社会学修士	拠点リーダー			
Matubara Yoko 松原 洋子(53)	先端総合学術研究科先端 総合学術専攻・教授	科学史/科学 技術社会論 ・博士(学術)	【G I : 集積と考究】 G I 統括・拠点副リーダー			
Koizumi Yoshiyuki 小泉 義之(57)	先端総合学術研究科先端 総合学術専攻・教授	哲学/倫理学 ・哲学修士				
Otani Idumi 大谷 いづみ(52)	産業社会学部・教授	生命倫理学 ・博士(学術)				
Kurihara Akira 栗原 彬(75)	衣笠総合研究機構・教授	社会学・ 国際学修士				
Nishi Masahiko 西 成彦(57)	先端総合学術研究科先端 総合学術専攻・教授	比較文学・ 文学修士				
Watanabe Kozo 渡辺 公三(62)	先端総合学術研究科先端 総合学術専攻・教授	文化人類学 ・博士(文学)				
Endo Akira 遠藤 彰(64)	先端総合学術研究科先端 総合学術専攻・教授	生態学・ 理学博士	(平成23年11月11日急逝による辞退)			
Sato Tatsuya 佐藤 達哉(49)	文学研究科人文学専攻・教 授	心理学・ 博士(文学)	【G II : 学問の組換】 G II 統括・拠点副リーダー			
Nakamura Tadashi 中村 正(53)	応用人間科学研究科応用 人間科学専攻・教授	臨床社会学 ・社会学修士				
Mochizuki Akira 望月 昭(61)	応用人間科学研究科応用 人間科学専攻・教授	心理学・ 博士(心理学)				
Amada Josuke 天田 城介(39)	先端総合学術研究科先端 総合学術専攻・准教授	社会学・ 博士(社会学)	【G III : 連帯と構築】 G III 統括・拠点副リーダー			
Goto Reiko 後藤 玲子(54)	先端総合学術研究科先端 総合学術専攻・教授	経済学・ 経済学博士				
Paul Dumouchel Paul Dumouchel(61)	先端総合学術研究科先端 総合学術専攻・教授	政治哲学・ Ph. D.				
Hayashi Tatsuo 林 達雄(57)	衣笠総合研究機構・教授	国際援助論・ 医学士				
Matsuda Ryoza 松田 亮三(48)	社会学研究科応用社会学 専攻・教授	比較医療政策 ・博士(医学)				
Sakiyama Haruo 崎山 治男(39)	社会学研究科応用社会学 専攻・准教授	社会学・ 博士(社会学)	(平成21年12月1日追加)			

機関（連携先機関）名	立命館大学
拠点のプログラム名称	「生存学」創成拠点—障老病異と共に暮らす世界へ—
中核となる専攻等名	先端総合学術研究科先端総合学術専攻
事業推進担当者	（拠点リーダー）立岩 真也 教授 外 15 名
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>障害、老い、病気、異なりなど、ままならない身体とともに生きる人がいる。それは、福祉や医療の援助の対象であると同時に、人々が生きていく過程であり、生きる知恵や生きる技が創出される現場である。様々な身体の状態を有する人、状況の変化を経験して生きていく人、すなわち「障老病異」の当事者の生の様式・技法を知り、社会との関りを分析し、それらの人々のこれからの生き方を構想し、あるべき社会・世界を実現する手立てを示すことを目的として、本学は「生存学」創成拠点を設置した。</p> <p>関連する研究は、国内外において過去にも存在していたものの散在しており、研究の拠点はどこにも存在しなかった。本学においては、先端総合学術研究科という学融的大学院が拠点の中核となり、社会学を中心として、哲学・心理学・経済学などの研究者が協働し、事業推進担当者として当事者と連携しつつ、調査・研究プロジェクトの組成かつネットワーク化を推し進める。また、そのフィールドにおいて、大学院生を中心とする若手研究者は、自らの問題意識と社会からの要請の両側面から研究活動を深める。その成果については、紀要『生存学研究センター報告』として取りまとめられ発信されると同時に、一般雑誌『生存学』としても社会に広く報告する。さらには、HPにおいて、日・英・韓など多言語発信を行う。この5年間の取り組みにより、本学は「生存学」という特色ある新領域分野形成に一定の地歩を築く。</p> <p>〔拠点形成計画及び達成状況の概要〕</p> <p>本拠点では、3つのプロジェクト【GI～III】を基盤としつつ、プロジェクト横断的な協力体制を組み拠点形成を進めてきた。</p> <p>【GI集積と考究】については、生存学関連（闘病記・障害者手記ほか）の書籍を収集し、情報の蓄積・整理に取り組み、一般には入手困難な患者会機関誌等とともに、データベース化・ウェブ公開を進めた（現在9,100冊）。現在、本拠点HP(arsvi.com)のアクセス件数は年間約1,100万件を数える。メールマガジンについても、日本語のほか英語・韓国語版を事業期間の5年間で各々70号・21号発行し、事業開始後内容の充実化を図った英語・韓国語ウェブサイトとの相乗効果を得た。また、「院生プロジェクト」「若手研究者グローバル支援」など、本拠点独自の若手研究者支援策の実施により、院生・PDの単著・共著は平成19～23年度の5年間で29点が刊行され、さらに、『生存学研究センター報告』では本拠点サブプロジェクトの成果をPD・院生を編者に積極的に登用して刊行、特に『視覚障害者支援技法』は好評のため増刷した。また、一般書店で発売した雑誌『生存学』（生活書院）では、事業推進担当者による査読制をとり、第1～5号において延べ98名の院生が執筆を担当するなどの成果が生まれた。</p> <p>【GII学問の組換】については、障害等を有する当事者が教育を受け研究を行うための条件整備、特に情報へのアクセシビリティに注目して、読書障害を持つ学生・院生に対して、本拠点関係者が関る書籍を中心に、出版社等とも連携しながらデジタル・データの充実を図り、また重度身体障害者や聴覚障害のコミュニケーション支援技術の検討をはじめとする活動ならびに成果などをHPに掲載した。</p> <p>【GIII連帯と構築】については、韓国障害学研究会、イギリス・リーズ大学社会学・社会政策学部障害学センターとの研究覚書締結や研究交流企画の開催を行った。これらは中間評価にて課題と指摘された国際化促進に関する取組である。大学院での集中講義の実施や研究集会（ワークショップ）への院生参加や本学国際先端プロジェクトでの取組を発展させたことで、同時に本拠点の若手研究者に対する評価も高まった。さらに、英文ウェブジャーナル<i>Ars Vivendi Journal</i>も平成23年度から発刊し、若手研究者もまきこみながら拠点の国際化を進めた。</p> <p>自己評価活動においては、内部評価のほか、アーサー・フランク（カルガリー大学教授）や石川准（静岡県立大学教授）など国内外の有識者による外部評価委員会を設置し、学術的新領域として「生存学」の意義が確認され、若手研究者育成の実績とあわせて高い評価を得た。加えて対外的理解増進についても、既存学会での評価が高まり、そうした成果の一つとして、平成24年度の日本生命倫理学会年次大会は、「生存と生命倫理」がテーマとして取り上げられることに決まった。</p>	

## 6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

本拠点においては、社会問題関心喚起型のコラボレーション研究活動を一つのモデルとして国際化を図っており、以下に述べる4類型を基本として具体的な推進を図っている。

### 問題解決コラボレーション型

価値観や社会観の類似したアジア圏において、共通性のある課題・問題について協働で取り組むことを想定しているが、本拠点においては、特に韓国の大学等とのコラボレーションが進展した。平成20年10月に、日韓障害者運動史懇談会を本学にて開催、翌21年5月には同じく本学で、「国際シンポジウム：障害者による支援の未来―日・台・韓協働の可能性」を開催したことで、アジア社会における協働と連携の橋頭堡を築いた。このことは同年11月の「韓国障害学研究会」設立の側面的支援となり、同研究会発足記念講演を本拠点リーダーの立岩真也が務めることとなった。

平成21年2月に開催した東アジアALS国際シンポジウム「東アジア難病ネットワーク構築に関する研究」では、韓・台・モンゴルのALS協会より、麻痺症状を伴う患者および介護者・患者関係者各2組をシンポジウムおよびプロジェクト会議に招聘することで、ALS、筋ジストロフィー等の難病に関する（東）アジアの研究ネットワークを形成しつつ、本拠点の活動意義をアピールすることができた。

### 国際開発援助・エリアスタディ型

相対的に「先進」国である日本の知識・技術を必要とする地域・国への支援や援助を含む研究活動や交流を想定しているが、本拠点においてはアジア・アフリカでの活動を行っている。

平成21～22年度、中国にて特殊教育学校における教師養成プログラムの提供を行った。これは障害者支援を医療モデルから社会モデルに転換するための取り組みの一環であり、望月昭が担当した。また、平成21年度、医師免許をもつ林達雄が、エチオピア・ケニアにおいて飢饉、エイズ、援助に関する調査を行った。また、実効性のある援助の可能性を探るために、本拠点の大学院生が、人類学的アプローチを用いて、アフリカの難治性感染症に関する医療ガバナンス問題を調査した。このような開発支援の現場は、古典的な人類学のフィールドとされてきた地域とほぼ重なり合う。レヴィ＝ストロースの研究において国内第一人者である渡辺公三の人類学史的研究およびアフリカ研究、またその指導下にあつてモンゴル・パナマ・アルゼンチン・アンチル諸島などをフィールドとする院生たちの研究は、先端領域としての文化人類学とエリアスタディーズの接点を模索していると言える。

### 先端領域開発型

本拠点の事業推進担当者が培ってきたもので、独自の知見として国際的に発信し、海外からも一定の評価を得つつある研究活動を想定しているが、本拠点において最も目覚ましい活動を展開しているのは、後藤玲子とポール・デュムシエルである。これまで後藤が牽引してきた「グローバル正義」をめぐる国際学術集会和、デュムシエルが企画・実施してきた「多文化主義」をめぐる国際学術集会は、平成20年度以降連携を強め、国際発信力と国際間研究者ネットワーク形成に貢献してきた。数年にわたって開催されている国際カンファレンス「絆と境目―正義と文化に関する新しいパースペクティブ―」は、海外の主要な研究者が本拠点を訪れたり若手研究者に発表の場を提供する格好のプラットフォームになっている。

このほか、松田亮三による「健康・公平・人権：健康格差対策の根拠を探る」国際シンポジウムや、ベルガモ大学との研究交流協定に基づくデュムシエル・松原洋子の「ヘルスケアにおける感情の機械化に関するワークショップ」など交流の実質化が進んでいる一方で、西成彦による東アジアの比較文学研究がポストコロニアリズムの新しいあり方として注目を集め、時空間の文化心理学的的方法論である佐藤達哉の複線径路・等至性モデルが世界各国の研究者に受け入れられるなど、国際学会への参加が契機となって注目される業績も少なくない。

### 基盤整備キャッチアップ型

伝統的な人文社会科学のスタイルであるが、本拠点においては、欧米の先駆的理論研究の翻訳・照会ならびに批判的検討に加え、欧米からの研究員招聘、国際シンポジウムの共同開催など、日本的な思想や議論を加味した国際的発信を活発に行うことで、生存学の新しさや潜勢力をアピールできると考えてきた。小泉義之・大谷いづみによる生命倫理学においては、国際的動向と日本の死生観を取り入れた議論を作り出し、日本語以外の言語でも発表を重ねている。また、分配的正義に関する三部作とも言える、立岩・村上・橋口 2009『税を直す』、立岩・齋藤 2010『ベーシックインカム―分配する最小国家の可能性』、トマス・ボッケ著 立岩他訳 2010『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか―世界的貧困と人権』の刊行は、知識の国際的平準化のみならずオリジナルな着想が見られる、本拠点ならではの優れた営みであると言える。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	立命館大学	拠点番号	E12
申請分野	学際、複合、新領域		
拠点プログラム名称	「生存学」創成拠点		
中核となる専攻等名	先端総合学術研究科先端総合学術専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)立岩 真也		外 15 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的はある程度達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援については、戦略目標として「世界に開かれたアジア太平洋地域の教育・研究拠点」を掲げ、生存学研究センターの設置や大学からの特別の予算措置、奨学金制度による支援が行われたものの、当初の目標とした「生存学」創成に対して事業推進担当者間及び学内での組織的な連携を強化しつつ、拠点の意義や役割を明確にして、当初計画に掲げられた「生存学」の概念や目標、学問として確立させるプロセスについて対外的にも十分に理解を得るに至ったとは言い難い。

拠点形成全体については、若手研究者を中心とするプロジェクトの推進や研究活動の公開・情報発信において継続的な努力が行われ、学術雑誌『生存学』、『生存学研究センター報告』の刊行において、当初の目標に沿って弛まない努力がなされたと判断されるが、国際的に卓越した拠点として、国際的な連携や協働による研究活動の更なる展開が期待される。

人材育成面については、若手研究者が教育研究拠点形成へ寄与できるように、特に共同研究の遂行、大学院学生への多様な指導体制や個別指導に配慮された継続的な努力がなされた。その結果、研究成果の積極的な公表が行われ、査読付き論文数が増加すると共に、実務現場で活躍する人材を多く生み出している。

研究活動面については、「障老病異と暮らす世界」を構築するための学問的努力は貴重なものであると評価でき、社会問題に基づく視点や「生存学」に関する新たな研究パラダイムの構築を目指すための継続的な努力が行われてきたものの、現状は「生存学」創成拠点としての客観的理解を得るに至る成果を示したとは言い難く、学問的な体系化を目指す努力や国際的な研究活動の取組において、一層の努力が求められる。

今後の展望については、「生存学」における学問の体系化や創成に至る過程において具体的な目標を明確化しつつ、当初の目標である「生存学」創成が実現されるよう大学の支援も得た上で継続的な努力が求められる。本事業終了後の持続的展開について、生存学研究センターの設置期間延長の措置は評価でき、当初目標とした「生存学」拠点が創成されるよう切に期待する。



<p><b>【意見及び理由】</b></p> <p>『平成 19 年度グローバルCOEプログラム拠点形成計画の概要』に掲げたように、われわれは「このままの世界では生き難い人たちがどうやって生きていくかを考え、示す」使命を着々と果たしつつある。この点は「対外的な理解」の一部として考慮されることを望みたい。</p> <p>われわれは、「障老病異」について、その当事者のため、そして当事者とともに研究し、成果を生産し発信する場の創成をめざした。ジェンダー・スタディーズや、ディスアビリティ・スタディーズ（障害学）がそうしたモデルを示している。この観点からすれば、「研究システム」の構築という目標は、かなりのところまで達成されたと認識しており、また、COE実施の目的であった高度な研究能力を有する人材が育成され、多くの成果を挙げてきたと自負している。</p> <p><b>【申立て箇所】</b></p> <p>第 2 段落の「学術雑誌『生存学』、『生存学研究センター報告』の刊行において、当初の目標に沿って弛まない努力がなされたと判断されるが、国際的に卓越した拠点として、<u>国際的な連携や協働による研究活動の更なる展開が期待される。</u>」</p>	<p><b>【理由】</b></p> <p>本文について、拠点の意義や役割及び「生存学」の概念や目標・学問として確立されるプロセスについて指摘したものであることから修正しない。</p> <p><b>【対応】</b></p> <p>原文のままとする。</p>
<p><b>【意見及び理由】</b></p> <p>われわれは、3 か国語のメールマガジンの配信、4 か国語のホームページの作成・増補を継続してきた。それは拠点の案内、催しの告知程度にとどまるものではなく、例えば拠点関係者全員とその研究内容・成果についての英語ページの作成・更新、関連事項に関する国外向け情報発信を行ってきた。その量・質は、他のCOEと比べても、遜色ないものと考えている。これらと毎年の研究交流を組み合わせ、海外の研究機関との恒常的な連携も形成・発展させてきた。さらに、英文電子ジャーナル『Ars Vivendi Journal』を発刊することにより（2011年度までに 2 号刊行）、本拠点から育った研究者たちが本格的に海外に向けて成果を発信する体制を整えてきた。「事業結果報告書」の p. 6 および p. 7 を参照された上で、評価に反映されることを望みたい。</p>	<p><b>【理由】</b></p> <p>事業結果報告書の内容は評価した上で「生存学」創成拠点としての更なる展開を期待したものであり、修正しない。</p>